

Re-Crossing Masaomi Igeta + Kazumi Ohgose + Kouichi Hiramukai Exhibition

Dogin Cultural Foundation Grant Program + Houmura Art Cultural Promotion Association Grant Program
2015. Mar. 25 - Apr. 05 (Closed - Tuesday) 11:00 - 18:00 (Closed 17:00 Lastday)
Sarou Houmura Gallery phone 011-785-3607 1-8-27, honchou-1jyou, higashi-ku, sapporo, Hokkaido, JAPAN

井桁雅臣、大古瀬和美、平向功一という三人の画家が、約30年の時を隔てて再び集まり展覧会を開こうとしている。その30年前というのは、北海道教育大学札幌分校の2年生になったばかりの彼らが市内の道特画廊で「Japanesque Exhibit」展と題した三人展を開いた時である。彼らは私の3年後輩にあたり、在学生のなかでも特に現代的志向が強く目立つ存在だった当時から今に至るまで、その活動を関心をもって見てきたつもりである。各学年30人いた同世代の特設美術課程の卒業生には、教職に就きながら道内の公募展などを中心に活動を続ける者もいるが、その他の多くは制作からは離れている。そうしたなか、この三人はしっかりと独自の世界を築きながら作家活動を続けてきたのだが、大学に入って間もない頃に彼らが結びついたのは、志を同じくする者に対する鋭い嗅覚が互いに働いた故なのだろう。いや、三人が学生時代に開いた2回のグループ展、さらに三人でのニューヨーク旅行などを通して共有した問題意識とそれによってさらに高まった制作意欲が、彼らをここまで牽引する大きな力となったと言うべきだろうか。

卒業後は、住む場所も離れ、制作の方向性も異なるなかでほとんど交わることなく、年月は流れた。

井桁雅臣は、大学を卒業した1988年に年上の現代美術家達に交じて北海道現代作家展（北海道立近代美術館）に出品。札幌で制作を続けながら「RENEWAL-1990への前哨展」、「HIGH TIDE」などのグループ展や個展で作品を発表してきた。札幌芸術の森美術館や北海道立近代美術館での企画展への出品のほか、2003年にVOCA展（上野の森美術館）へ推薦され、2011年には道銀文化奨励賞を受賞している。近年は描くこと自体の悦びへの回帰から、透明感のある鮮やかな色彩とストロークの滲みが画面上に乱舞する華やかな作品を制作しており、観る者の遠い記憶をやさしく刺激てくる。

大古瀬和美は、卒業後すぐに東京に出た。東京国際フォーラム-Exhibition Spaceやギャラリー砂翁&トモスなど東京での個展を中心に発表する一方、2013年には南房総市にある寺院の納骨堂壁画も手がけている。一貫して描いてきた茫漠とした色彩の広がりや帯状の色の連なりは、可視的な現象としての光とは異なる、人の心に内在する輝きを醸し出しているように感じられる。悠久の時間や宇宙的な広がりのなかで自分が今ここに居ることと真摯に向き合う姿勢は、東日本大震災によるそれまでの世界観の崩壊を味わうことでさらに強まりをみせるとともに、“祈り”とも言える深い精神の思索へと向かっている。

平向功一は、卒業後に中学校教員としてえりも町に赴任、現在は札幌大谷大学で教鞭を執りながら札幌で精力的に日本画を制作し、道展会員及び創画会会友としても活躍している。1999年に道銀文化奨励賞、2008年に札幌文化奨励賞を受賞するなど、比較的早くからこれから北海道文化を担う人材としても期待されてきた。多様な動物と建造物や乗り物などを組み合わせた物語性のある空想的世界をダイナミックに描き続けており、近年は画材の研究を深めてエゾ鹿の膠づくりに挑戦する一方で、日本画の表現領域を拓げるべく立体への展開も試みている。

この三人が50歳という節目を迎え、改めて自らの画業を振り返りこれからの方向性を確かめようとした時、その活動の原点とも言える最初のグループ展に行き着くのは、自然なことでもあろう。同じ出発点をもちながら、それぞれ別々に信ずる道を探究し歩んできた。その成果としてある現在の作品が再び交わる時、各自が過ごした時間の密度が濃ければ濃いほど、単に同窓会的な展示に終わらずに、確かなものがきっと見えてくるにちがいない。

吉崎元章（札幌芸術の森美術館副館長）